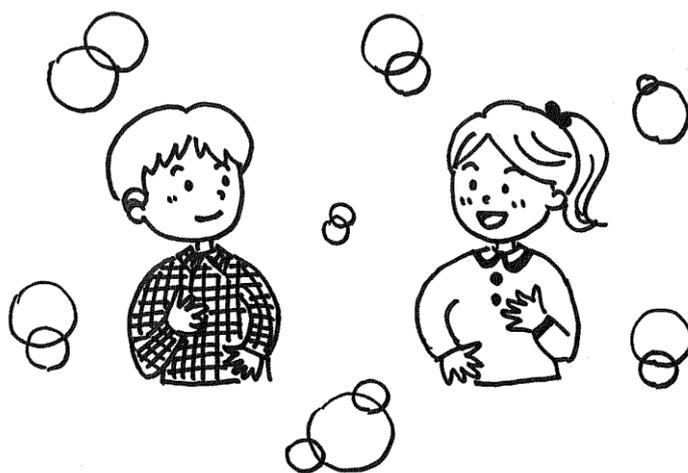


# 聴覚障害教育Q&A 50

～聴覚に障害のある子どもの指導・支援～



独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所  
平成28年3月



この冊子をお読みくださる方へ

この冊子は、国立特別支援教育総合研究所の研究（註）をもとにつくられたものです。主たる目的は、初めて聴覚障害の指導に当たる小・中学校の先生や聾学校の先生に対して、主な指導場面を抽出し、参考にさせていただくためです。

研究協力をいただきました聾学校の先生のご意見や研究協力者のアドバイスに基づいて作られています。

Qは50ありますが、どこからお読みになっても結構です。

この冊子をお読みいただくことで、聴覚障害教育に関心をもち、理解を深めていただければ幸いです。

（註） 国立特別支援教育総合研究所 平成26年度～27年度専門研究B「聴覚障害教育における教科指導及び自立活動の充実に関する実践的研究～教材活用の視点からインクルーシブ教育システム構築における専門性の継承と共有を目指して～」(研究代表 原田公人)

## 目 次

- Q 1 : オージオグラムの見方を教えて下さい。
- Q 2 : 指文字と手話の違いは何ですか。実際にどのように指導するのですか。
- Q 3 : 「9歳の壁」とはどのようなことでしょうか。
- Q 4 : 聴覚障害児の言葉が育ちにくいのはどうしてでしょうか。
- Q 5 : 音の大きさ・高さについて、生活で聞く音との関係はどうなっているのでしょうか。
- Q 6 : 補聴器点検をしていたら昨日と今日が違い、補聴器の音が歪んでいるようです。どうしたらいいのでしょうか。
- Q 7 : A児とは手話（単語）でコミュニケーションをすることが多いのですが、確実に伝わっているか、よく分からないときがあります。確実にコミュニケーションできているかを確認するには、どうしたらいいのでしょうか。
- Q 8 : 聴覚活用は、実際にどのように指導するのでしょうか。
- Q 9 : 発音指導は実際にどのように指導するのでしょうか。
- Q 10 : 「一次的事物」と「二次的事物」について教えてください。
- Q 11 : 言語指導とは何ですか。実際にどのような指導をするのでしょうか。
- Q 12 : 口声模倣とは何ですか。実際にどのように指導するのでしょうか。
- Q 13 : 聴覚障害児の言語習得において、繰り返し（ドリル・反復練習）が必要だと言われますが、どの程度すればよいですか。
- Q 14 : 聴覚障害児が言語を獲得していくための配慮事項について教えてください。
- Q 15 : 補聴器を管理するための配慮事項について教えてください。
- Q 16 : 補聴器と人工内耳の違いは何ですか。
- Q 17 : なかなか補聴器がつけられません。どうすればつけられるようになるのでしょうか。
- Q 18 : FM補聴システムを使用していますが、どのようなことに気をつけるとよいですか。
- Q 19 : 難聴の子どもの座席位置について、どのように配慮するといいいですか。
- Q 20 : 高い音に対して不快感を示す難聴の子どもがいますが、どのように対応するといいいですか。
- Q 21 : DVDを見る時に、音を大きくすればよいと思って、大きな音を出したら、補聴器を両手で押さえてしまいました。音をどのように調整すればいいのでしょうか。
- Q 22 : 家庭での補聴器の管理で気を付けることはどんなことですか。
- Q 23 : ことばの数が少ない子どもに対してどのように配慮するといいいですか。
- Q 24 : 難聴児は「なぜ言葉を理解しにくいのか」、「なぜ言葉が定着しにくいのか」について教えてください。

—教科等の指導—

- Q 2 5 : 授業で、子どもを集中させるにはどのようにするとよいですか。
- Q 2 6 : 授業の時に「分かりましたか」と聞くと「分かりました」と返事をしてくれますが、ノートには、ちゃんとした答えが書けていません。どうしたらいいのでしょうか。
- Q 2 7 : 学力差が大きい学級です。どのような配慮が考えられますか。
- Q 2 8 : 教師主導ではなく、子ども同士の活動が大事と言われるますが、どのような点に注意するとよいですか。
- Q 2 9 : 小学部（小学校）の低学年の授業で、教科書の音読はどのように行うとよいですか。
- Q 3 0 : かけ算九九をなかなか習得できませんが、どのように覚えさせるとよいですか。
- Q 3 1 : 音楽科の授業は、年齢が上がるにつれて苦手意識が強くなります。どのように指導すればよいのでしょうか。
- Q 3 2 : 通常の学級に在籍していますが、難聴児一人だけを指導することが難しいです。どのような点に配慮するとよいですか。
- Q 3 3 : 国語科の指導で、音読や読み聞かせの時に、何に配慮すればいいですか。
- Q 3 4 : 体育の時に、ホイッスルが聞こえなくて、ルール違反してもそのまま、プレーをしまい、友だちから嫌がられることがあります。教師はどうしたらいいのでしょうか。
- Q 3 5 : 調理実習の時に水が飛び散って、補聴器が濡れてしまいました。どうしたらいいのでしょうか。
- Q 3 6 : 教師が黒板の方を向いて、文字を書きながら説明すると分からないと言われます。どうしたらいいのでしょうか。
- Q 3 7 : 教科学習では、4～5名の班になって話し合い活動をする場面が多くあります。聴覚障害のある児童に配慮することはどのようなことでしょうか。
- Q 3 8 : 発表するときに、「サ行」がきれいにしゃべれなくて、友だちが笑う時があります。本人も気にしているようです。どうしたらいいのでしょうか。
- Q 3 9 : 英語の発音が聴き取れません。英単語にカタカナを書いて読んでいます。どうすれば聞き取りと発音ができるようになるのでしょうか。
- Q 4 0 : 自立活動は、コミュニケーションだけ行えばいいのでしょうか。
- Q 4 1 : 個別の指導計画について、保護者の方に説明する際、どのような点に留意して話をすればいいのでしょうか。
- Q 4 2 : 幼児に色や動物、物などの名前を覚えさせるには、どうしたらよいのでしょうか。
- Q 4 3 : 家庭で絵日記（日記）を書かせる場合、どのようなことをアドバイスするとよいですか。
- Q 4 4 : 聾学校で学級の子どもが二人です。少人数学級で指導する場合の工夫や配慮について教えてください。
- Q 4 5 : 通常の学級（小学校）で、聴覚障害について、周りの子どもたちへの難聴理解をどの

ように進めるとよいですか。

Q 4 6 : 交流及び共同学習で、相手の学校の子どもは「指文字」で自己紹介をしてくれますが、聴覚障害のある子ども本人には、分かりにくいようです。どうしたらいいでしょうか。

Q 4 7 : 社会見学で、地下鉄に乗ったら、「ゴーッ」とかなり大きな音でした。そのような場合、担任はどのようなことに気をつければいいでしょうか。

Q 4 8 : 宿泊学習では、寝るときに補聴器をはずします。寝ている時、緊急事態が起きたらどうしたらいいのでしょうか。

Q 4 9 : 交流学級に入った時、難聴特別支援学級の担任としては、どのように支援すればよいのでしょうか。

Q 5 0 : 聴覚障害の子どもへの指導の仕方や配慮について詳しく知りたいです。どこに尋ねるとよいですか。

## Q 1 : オーディオグラムの見方を教えてください。

A : オーディオグラムは、その人が聴くことのできる最も弱い音（聴こえの閾値<sup>いきち</sup>）を記録するもので、横軸に音の高さである周波数（Hz）、縦軸に音の強さ（dB）が表示されています。通常レシーバーを使用して測定する気導聴力の結果（閾値）は、右耳を○印で、左耳を×印で表します。骨導聴力の結果は右耳を□印で、左耳を◇印で表します。また、オーディオメーターで最大音圧を出力しても被検者の反応がない場合は、スケールアウトとし↓印を付けます。なお、気導聴力の右耳は○印を実線で、左耳の×印は破線で結びます。ただし、スケールアウトの周波数は結びません。聴覚障害の程度については、以下のよう<sup>い</sup>に分類されています。（日本聴覚医学会難聴対策委員会難聴（聴覚障害）の程度分類について 2014. 7. 1）

25 dB 以上	～ 40 dB 未満	軽度難聴
40 dB 以上	～ 70 dB 未満	中等度難聴
70 dB 以上	～ 90 dB 未満	高度難聴
90 dB 以上		重度難聴

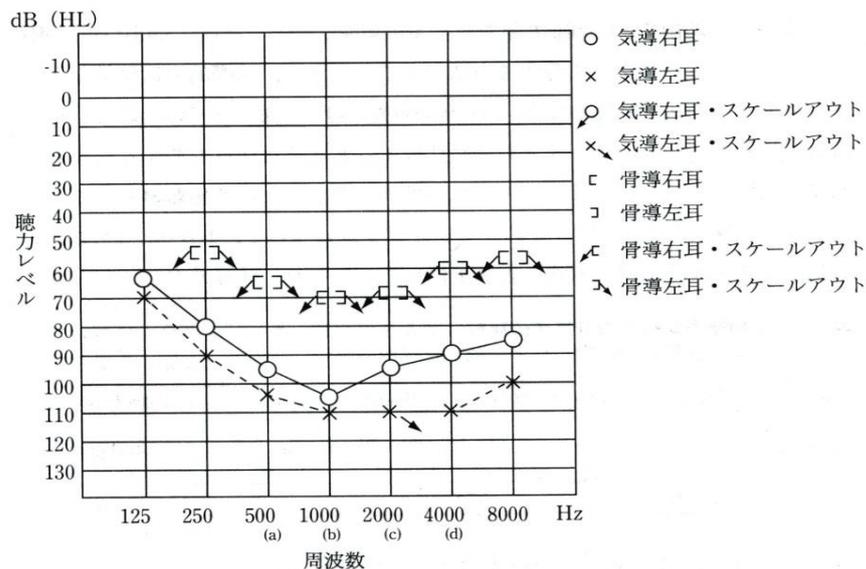


図 3-2 オーディオグラムの記載例

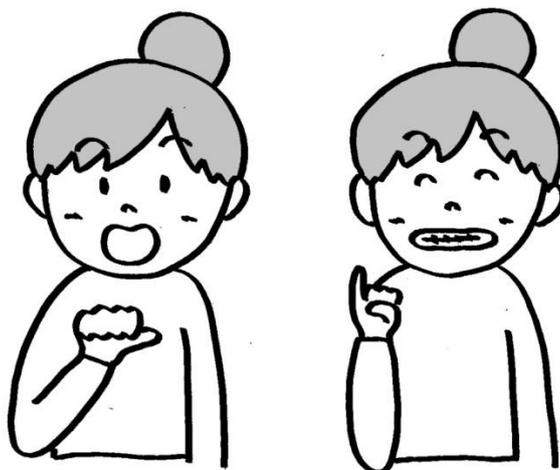
平均聴力レベル（四分法）の算出法  $((500\text{Hz} + (1000\text{Hz} \times 2) + 2000\text{Hz})) \div 4$

（出典：「教師と親のための補聴器活用ガイド」 大沼直紀 コレール社 より）

Q 2 : 指文字と手話の違いは何ですか。実際にどのように指導するのですか。

A : 指文字は、一つ一つ手指の形で日本語の音を表し、正しい日本語の習得にも効果があるといわれています。手話は、ものの形や動き、字の形や状態などの特徴をとらえて、顔の表情とともに手の形や動き、位置、向きなどによって意味を表す言葉です。指文字が音を表すのに対し、手話は手の形が意味を表しています。

手話は、一連の動きで一つの単語や言葉を表しています。手話単語にない単語、人名・地名・その他（固有名詞・新しい言葉など）については指文字を使って一字ずつ書記言語の綴りつづを表現して指導します。日本語の学習やコミュニケーションにおいては、指文字と手話を状況に応じて併用したり、使い分けたりして指導します。



Q3 : 「9歳の壁」とはどのようなことでしょうか。

A : 小学生の高学年（9歳くらい）の段階で、抽象的な語彙の習得や抽象的な思考が難しいために、読み書きや学力の面で伸びなやむ（停滞する）状態を意味しています。小学低学年までは生活中心の教材が多く、直接経験した題材を取り上げて学習していきますが、小学3・4年生になると児童の経験したことのないような事柄が増え、間接経験を主体にした題材が多くなり、理解しにくくなっていきます。

言葉による抽象的な思考の困難は、知的能力や学力に大きく影響を及ぼすと考えられています。日本語の生活言語を豊かに獲得させ、生活言語から学習言語への移行をスムーズにしていくことが大事です。

#### Q 4 : 聴覚障害児の言葉が育ちにくいのはどうしてでしょうか。

A : 聴覚障害があると、話し言葉が耳から入りにくくなると同時に自分の声も聞こえにくくなる場合もあります。私たちは言葉を含む音によって生活を営んでいることを考えれば、聴覚障害によって、音だけではなく、音や言葉を基にした物事の意味や関係など身の回りの情報が得られにくくなることは想像に難くありません。言葉は言葉だけで独立して育つのではなく、身の回りの様々な情報との関係の中で発達しますので、結果的に言語能力（語彙、文法などの知識）や言語運用（実際に使うこと）が育ちにくくなってしまいます。

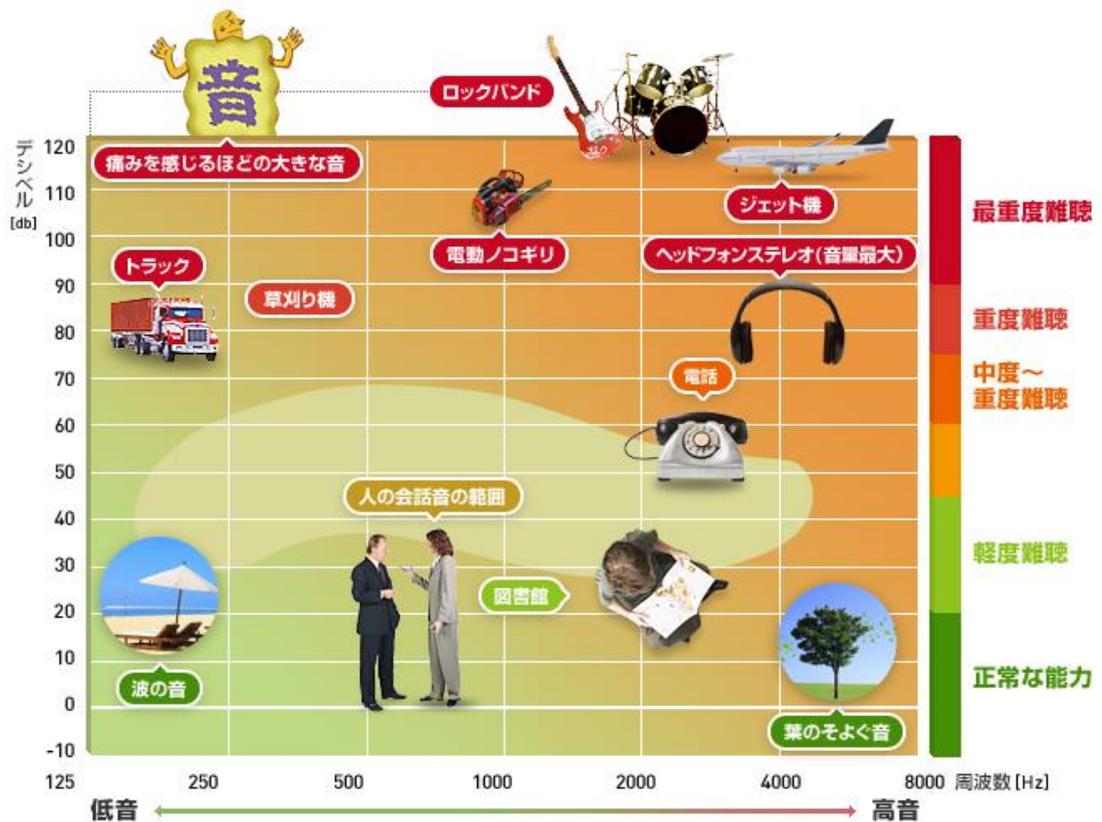
早期から補聴器等により聞こえを補償することに加え、手話や身振り等様々な方法によって、コミュニケーションと情報を保障しながら子育てすることが必要になります。

**Q5：音の大きさ・高さと、生活で聞く音との関係は  
どうなっているのでしょうか。**

A：ここでは、音の大きさを音圧（dB）とし、音の高さは周波数（Hz）としてお答えします。音の大きさは、いろいろな音の出るものを聞く時の音圧です。音圧が大きければ大きい音とか強い音と言いますね。逆に音圧が小さければ小さい音とか弱い音になります。

ある物から発せられている音の大きさは、その物との距離によっても異なってきます。近ければ大きく、遠ければ小さく聞こえるのはそのためです。これに対して音の高さは周波数として表され、船の汽笛のような「ポー」という音は低い周波数の音であり、金属音のような「キーン」という音は高い周波数の音に分類されます。実際にどのようなものが、どの程度の音圧や周波数であるのか、数種類の音に関して示した図と表を参考として下さい。

【音の大きさ・高低と難聴の程度】



Q 6 : 補聴器点検をしていたら昨日と今日で違い、補聴器の音が

<sup>ゆが</sup>歪んでいるようです。どうしたらいいのでしょうか。

A : 電池の状態を確認した後に学校に補聴器特性検査装置がある場合は、速やかに補聴器の特性検査を行い、実際に補聴器の出力特性が以前と異なっていないか比較しましょう。

異常が認められた場合は補聴器の故障が考えられるので、補聴器販売店へその旨を伝え、故障かどうかの確認をしてもらいましょう。梅雨の時期や夏場は、

湿気や汗で補聴器が故障することが多くなります。

定期的に、補聴器店に確認してもらうことをお勧めします。

Q7 : A児とは手話（単語）でコミュニケーションをすることが多いのですが、確実に伝わっているか、よく分からないときがあります。確実にコミュニケーションできているかを確認するには、どうしたらいいでしょうか。

- A : 教師が話したことをもう一度言わせたり、質問に答えさせたりします。そのときには、指文字やキューサイン、発音サインに発声を伴わせながら表出させたり、文字で書かせたりします。子どもの実態によっては、具体物や絵・写真カード等の視覚教材を用いて、子どもの気持ちを汲んで上手に確認することが必要です。
- どの手段が確実にコミュニケーションできるのか把握しておくことが重要です。手話だけのコミュニケーションでは微妙な文章表現がとらえにくいことがあります。同じ手話表現でも口形や発声を伴って話すことで、聞く側にとっては言葉の区別が付きやすくなります。コミュニケーションするときのルールとして確認することが大切です。

**Q 8 : 聴覚活用は、実際にどのように指導するのでしょうか。**

A : 子どもの聴覚の発達には周囲の情報と音の関係の理解によって進みます。このため、生活の中で子どもと一緒に音を聴き、音源を探したり、発声させたりしながら、音のイメージを作ることが聴覚の主体的な活用になります。

幼児の場合、いすとりゲームや音当てクイズなどの遊びをとおして指導します。この場合、子どもと一緒にゲームを楽しむことが大切です。遊びの中で、教師が、聞き分けや聞こえにくい言葉を説明し、意欲的な学習に発展させていきます。



## Q9：発音指導は実際にどのように指導するのでしょうか。

A：発音指導は子どもの発達段階や発音、聴力の実態に合わせて、指導を進めていきます。

- ①幼稚部段階では、生活全般において明るい自然な声を引き出していくことが大切です。子どもが発声することができたら、口声模倣（口まね）による発音指導や発音器官（舌、唇、顎）の訓練をとおして単音の発音練習を行います。
- ②小学部段階では、単音から単語の発音明瞭度の向上が目標になります。母音の安定と各子音の発音要領の獲得が大切です。獲得した発音要領については日常生活の中で誤音矯正を行いながら、明瞭さの維持に努める必要があります。
- ③中学部や高等部段階の発音指導は、誤音矯正が中心となります。授業や日常の会話において、発音の誤りや不明瞭な発音に気づいたら、指摘し、その場で練習する態度を育てることが大切です。

Q10：「一次的事ことば」と「二次的事ことば」について教えてください。

A： 「一次的事ことば」とは、生後から学校入学までの日常生活の中で行われる特定の相手との具体的で状況に頼った会話で使われることばを指すのに対して、「二次的事ことば」とは、学校入学後の生活で使われるような、不特定多数の相手に伝えたり、その内容を理解したりする状況に頼らない現実から離れたことばの理解や表現に使うことばを指します（図参照：岡本夏木）。

これらは発達的に移行するものではなく、「一次的事ことば」を基に「二次的事ことば」が学習されていくものです。「二次的事ことば」は、小学校4年生頃からの抽象概念を操作（理解や表現）するためには欠かせないことばです。

コミュニケーションの形態	一次的事ことば	二次的事ことば
状況	現実的場面	現実を離れた場面
成立の文脈	ことば+状況文脈	ことばの文脈
対象	少数の親しい特定者	不特定の一般者
展開	会話式の相互交渉	一方的自己設計
媒体	話しことば	話しことば、書きことば

なお、同じ意味で、一次的事ことばは「生活言語」、二次的事ことばは「学習言語」とも呼ばれます（齊藤佐和）。

**Q 1 1 : 言語指導とは何ですか。実際にどのような指導をするのでしょうか。**

A : 言語指導とは、聴覚に障害がある子どもがコミュニケーションをとおして、日本語の基礎的な能力を身につけるための指導です。指導に当たっては、言葉を介して言葉の概念を育て、具体的な言葉から抽象的な言葉の理解に進むように指導していきます。

実際には、以下のことに留意して指導することが大切です。

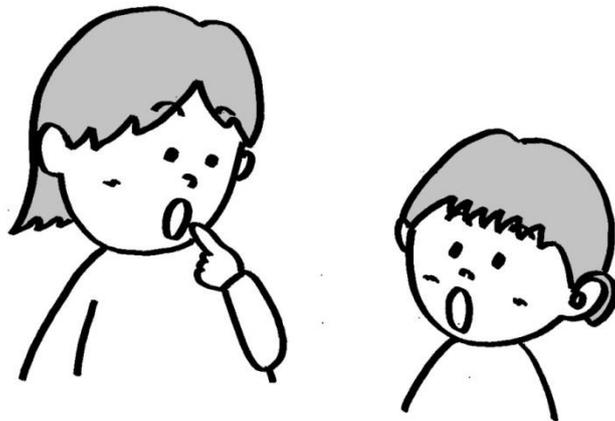
- ・ 日常のあらゆる機会、場面を通じて、子どもの心の動きを言葉にして、数多く投げかける。
- ・ 過去のいろいろな経験や体験などをもとに話し合う時間を設ける。
- ・ 意図的に特定の言葉を使用する場面を設ける。また、家庭や学校などの実際の場面でその特定の言葉を使用する機会を数多く設ける。
- ・ 自立活動の時間などで、言葉の意味や使い方について指導する。

Q 1 2 : 口声模倣とは何ですか。実際にどのように指導するのでしょうか。

A : 聴覚障害児は、耳から不完全な音しか入らないことが多いために、言葉を習得することが困難となります。そこで、耳からの情報と併せて口の動きを視覚で捉えさせることで、言葉を正確に子どもに伝えることができます。そして、子どもに声を出させて、言葉を復唱するように促し、子どもの記憶にとどめることをねらいます。これが、口声模倣です。

口声模倣で大切にしなければならないことは、子どもが口声模倣で促される言葉に必要性を感じているかどうかです。自分の気持ちを相手に伝えたい、分かって欲しいと感じている場面で、係わり手が、子どもの気持ちに合った言葉を、子どもに口の動きを見せながら話し、それを復唱するように子どもに促します。こうすることで、自然な形で、言葉が育っていきます。

口声模倣の他に、拡充模倣も大切になってきます。これは、子どもが話した言葉を、係わり手が更に内容を膨らませて子どもに返し、子どもに復唱を促すことです。



**Q 1 3 : 聴覚障害児の言語習得において、繰り返し（ドリル・反復練習）が必要だと言われますが、どの程度すればよいですか。**

A : 前出の「11」の設問中で、聴覚障害児の言語指導において「過去のいろいろな経験や体験などをもとに話し合う時間を設ける。」と記述してあります。確実に言語や学習内容を定着させるため、反復練習は非常に大切です。

しかし、何度も何度も形式的に繰り返すことだけで、言葉が習得できるものではありません。児童生徒一人一人の実態に即するということが大切で、それは、児童生徒一人一人の聴覚障害の状態や発達段階に配慮し、指導内容等も考慮することです。具体的経験を言葉で表現し自ら理解できるようにし、言語による思考力を高めることを常に意識しながら、言語習得のために繰り返し学習を行っていくことが不可欠です。このように、子どもの気持ちや興味・関心に即してドリルをすることが大切です。

特に、初めて触れる言葉は、一度その言葉を見たり聞いたりするだけで、定着させることはできません。子どもの生活のあらゆる場面で、その言葉に触れる機会を意図的に設け、何度も使っていくことでその言葉の持つ意味を理解し、生きた言葉として定着していきます。これらのことは、家庭との協力により、さらに効果が期待されます。

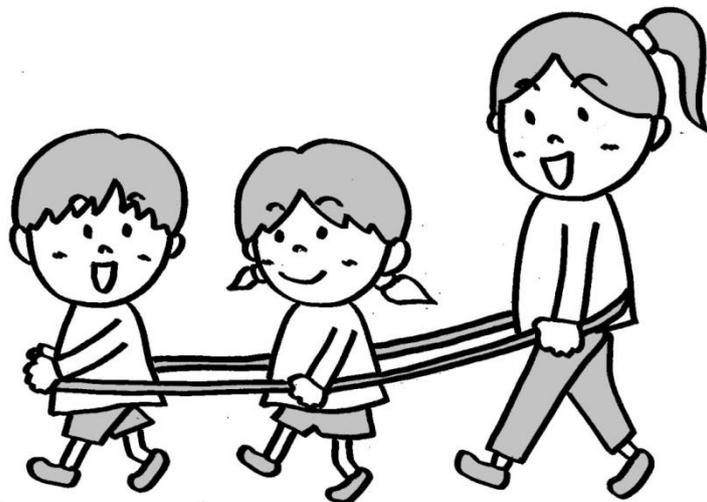
**Q 1 4 : 聴覚障害児が言語を獲得していくための配慮事項について教えてください。**

A : 子どもが、言葉を獲得していく土台は、係わり手と子どもとの「共感関係」です。いかに、係わり手が子どもの気持ちを理解するかが何よりも大切です。

聾学校の幼稚部では、教師が子どもと十分に遊びます。この遊びの中で自然と子どもと教師の共感関係が育まれていきます。

十分遊んだ後、教室で子どもたちとその遊びに関して話し合いをします。楽しかった思い出を教師と子どもが共感し合いながら言葉にしていきます。子どもの思いにぴったりの言葉を教師は選りすぐって、子どもたちに投げかけていきます。係わり手が子どもと同じ目線に立ち、子どもの心の動きを敏感に捉え、子どもの発達段階に合わせて言葉を投げかけていきます。

言葉を育むためには、この「共感関係」を幼稚部ばかりでなく、小学部でも中学部でも土台とし、聴覚を最大限に利用させるための配慮や聴覚からの入りにくさを補うための視覚的な情報保障のための配慮など、様々なきめ細かい配慮をすることが大切です。



**Q 1 5 : 補聴器を管理するための配慮事項について教えてください。**

A : 補聴器は、音や音声を大きくする器械です。補聴器を装用すれば、すぐに効果が現れるというものではありません。正しく使用することはもちろん、日頃からの管理が大切になってきます。

(1) 毎日の管理

- 電池の有無の確認
- イヤモールドの状態の点検（イヤモールドの穴に耳かすなどが付着していないか）
- 試聴チューブを使った補聴器の音の確認（担任や保護者などが行います。また、本人が音の異常に気づけるようになることも大切です。）
- 就寝時による補聴器本体の乾燥（乾燥機）
- 汗対策のための補聴器カバー装着
- イヤモールドの洗浄

(2) その他の管理

- 補聴器特性の測定
- 補聴器業者による補聴器のメンテナンス

## Q 1 6 : 補聴器と人工内耳の違いは何ですか。

A : 補聴器は「両耳あるいは片耳の難聴の方」が適用となり、難聴の種類は伝音性難聴でも感音性難聴でもかまいません。人工内耳の場合には、補聴器の効果がないかあるいはきわめて少ないほどの高度難聴が対象となります。補聴器は鼓膜をとおしての「音情報」を分析できるほどの能力を持っていることが必要です。

刺激は、補聴器が「音刺激」であるのに対して、人工内耳は「電気刺激」です。補聴器は「音」がまず鼓膜に達しますが、人工内耳は埋め込んだ電極が内耳の神経を直接刺激します。このため補聴器と異なり、人工内耳は電極の埋め込み手術を受ける必要があります。

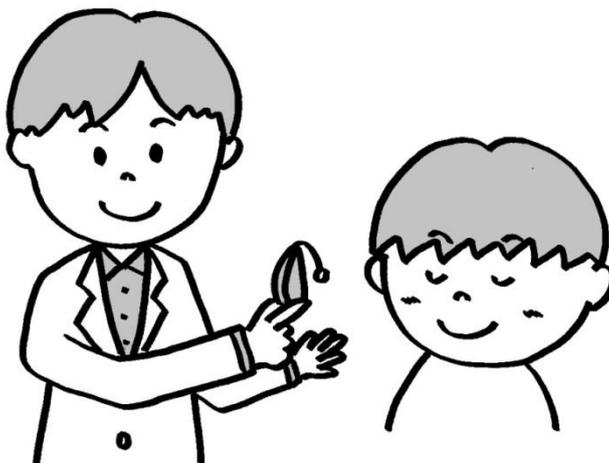
人工内耳装用時の聴力ですが、重度の難聴児でも感音性難聴の人が聞き取りにくいとされる高い周波数（高さ）においても 25～30dB 程度で反応することが多いです。聴覚障害児にとって、大変効果のある最先端の医療技術の一つです。

Q 17 : なかなか補聴器がつけられません。どうすればつけられるようになるでしょうか。

A : 先天性難聴と早期に診断された場合、生後6～7ヵ月ごろから、補聴器の装用が始まります。小さい子どもの場合、補聴器を嫌がって、なかなかつけられないということも多くあるので、耳に触れる感覚に徐々に慣れさせること、また補聴器をとおして音を聞く経験を積み重ねることなどが必要です。

就学児でもなかなか補聴器がつけられない場合は、まず、小さい子どもと同様に対応するとともに、補聴器の適切な「フィッティング」を行うことが必要です。「フィッティング」とは、補聴器の選択、調整、補聴器による聞こえの確認とその評価を行うことです。

補聴器の専門家（言語聴覚士や補聴器販売店の認定補聴器技能者など）に、適切な「フィッティング」をしてもらうことで、補聴器を装用できるようになることも多いです。



**Q 1 8 : FM補聴システムを使用していますが、どのようなことに気をつけるとよいですか。**

A : FM補聴システムとは、胸元に装着した送信マイクを通して話し手の声が、FM電波に受信機に送られ、補聴器や人工内耳で聞くことができる集団補聴システムの一つです。補聴器が周囲の騒音を拾ってしまう騒がしい場所や、反響の多い場所、話し手との距離が離れている場所で役立ちます。使用に際しては、次のような点に注意してください。

(1)マイクの電池（バッテリー）が切れていないかどうかをチェックする。  
基本的なことですが、FM補聴システムも機器です。電池（バッテリー）がないと作動しません。

(2)送信機のマイクをつける位置を一定にする。  
マイクは口元から20cm以上離れるとあまり声を拾いません。また、口元に近づけすぎても、ゆがんだ音やこもった音になり、かえって聞きづらくなることがあります。口元からマイクまでの距離をできるだけ一定に保ってください。

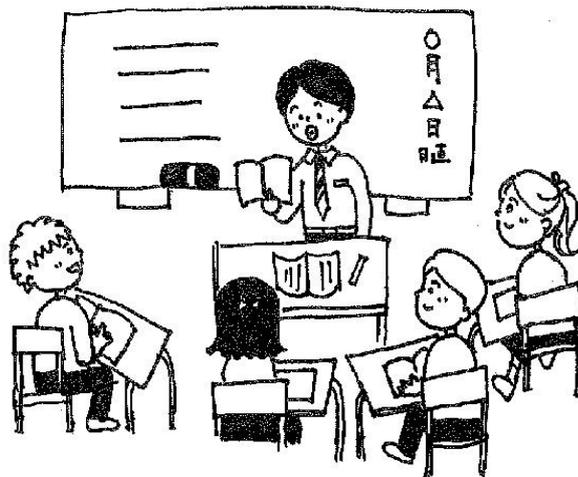
(3)送信機のミュート（消音）機能をうまく使う。  
送信機のスイッチをずっと切らないままで、机間巡視をして他の子どもに話しかけると、その声がFM補聴器を使用しているすべての子どもたちに聞こえることとなります。  
必要のないときには、送信機のミュート（消音）を使うようにしてください。なお、スイッチを切ってしまうと、起動までに時間がかかってしまいます。

(4)補聴器のプログラムの確認が大切。  
FM補聴システムの受信機は、補聴器に直に装着するタイプと首にかけるタイプがあります。補聴器のプログラムの設定状況を把握しておき、FM補聴システムを使用する際には、FM補聴システムのプログラムに変更する（切り替える）ことが必要となります。

Q 1 9 : 難聴の子どもの座席位置について、どのように配慮する  
とよいですか。

A : 聴覚障害の子どもたちが小学校や中学校の教室内で学習を行っていくためには、教室の環境整備や座席位置の配慮等を行うことは、もっとも基本的なことです。座席位置の配慮として、以下の点が挙げられます。

- (1) 出席番号のように単純な座席順ではなく、子どもの状態に合わせた座席の位置にする。
- (2) 先生の表情や指示が見やすい位置、教室全体の雰囲気が見渡せる位置が適当です。具体的には、先生の口元が逆光にならない中央からやや窓側、前から2～3列目辺りが適当です。良聴耳（よくきこえる方の耳または人工内耳をつけている側の耳）から音が入りやすいように考慮することも大切です。
- (3) 数名の児童生徒による学習の場合は、机の配置を「馬蹄形」(Uの字)にしてお互いの口元を見えやすくし、児童生徒間のコミュニケーションを活発にする配慮が必要です。



**Q 2 0 : 高い音に対して不快感を示す難聴の子どもがいますが、  
どのように対応するといいですか。**

A : まず、補聴器の適切な「フィッティング」をすることです。「フィッティング」とは、補聴器の選択、調整、補聴器による聞こえの確認とその評価を行うことです。補聴器の専門家（言語聴覚士や補聴器販売店の認定補聴器技能者など）に、適切な「フィッティング」をしてもらうことによって、音への不快感も軽減されます。

近年、補聴器の性能は非常に向上し、高音域の聞き取りを可能にする機能やハウリング（不快なピーピー音）を瞬時に、かつ強かに抑える機能、周囲の騒音状況を分析して自動的に騒音を抑える機能などが備わっている補聴器が開発され、販売されています。

Q 2 1 : DVD を見る時に、音を大きくすればよいと思って、大きな音を出したら、補聴器を両手で押さえてしまいました。音をどのように調整すればいいでしょうか。

A : 聴覚に障害のある子ども一人ひとり聴力はみな違います。多くの子どもは、聞こえる部分（保有する聴力）が残っており、まったく音が聞こえないということはありません。

補聴器を装用している子どもによって、ある音がうるさいと訴える場合があります（リクルート現象）。補聴器の専門家によって、子どもが不快にならないように調整する必要があります。

Q 2 2 : 家庭での補聴器の管理で気を付けることはどんなことですか。

A : 家庭では、補聴器は以下の管理が大切です。

- ①電池の残量をチェックする。
- ②補聴器の音を聞いていつもと同じ音が出ているかを毎日チェックする。
- ③汗をかいた時などはきちんと補聴器本体をふいて、乾燥剤の入ったケースに入れる。
- ④イヤモールドは適宜、きれいに洗う。



**Q 2 3 : 言葉の数が少ない子どもに対してどのように配慮するとよいですか。**

- A : 乳幼児期は楽しい遊びの中で、小学校低学年段階では毎日の生活の中で常に生きたことばの中で活動し(経験したこと、目に見えるもの等)、小学校高学年段階では、行動や思考につながる言葉を習得できるような環境を意図的に設定することが大切です。
- そして、絵や写真、手話や指文字、文字など目に見える形で提示し、言葉の定着を図ります。

**Q 2 4 : 難聴児は「なぜ言葉を理解しにくいのか」、「なぜ言葉が定着しにくいのか」について教えてください。**

A : 聴覚からの情報が入りにくいため、聞こえる人に比べ言語情報の絶対量が少ないことや自分で話していることを耳から十分なモニターができない（聴覚回路の機能が十分に働かない）ことから、言葉が理解しにくかったり、発音が不明瞭になったりします。

また、聴覚に障害があると、「聞き漏らし」や「聞き落とし」に気付かない場合も多いために、言葉が定着しにくいことが考えられます。

このため、その場に合った言葉を使う頻度を増やすことが大切です。

**Q25：授業で、子どもを集中させるにはどのようにするとよい  
ですか。**

- A： 一般に子どもが物事に集中できる時間は3分間程度と言われています。その子どもの発達段階に応じて集中できる時間を見極めることが重要です。その上で、子どもが興味・関心を示すような教材を準備したり、子どもにとって意外な言葉を投げかけたりするなど、教師の話し方を工夫することが大切です。
- また、授業の流れを見て、子どもがリラックスするような時間を設けることも大切です。

Q26 : 授業の時に「分かりましたか」と聞くと「分かりました」と返事をしてくれますが、ノートには、ちゃんとした答えが書けていません。どうしたらいいのでしょうか。

A : 聴覚に障害がある子どもは、「わかりました」という言葉を、必ずしも授業内容などを理解した上での応答でない場合があります。子どもにとっては、教師の説明が長かったり、途中で話が変わったり、例示が多いなど、まとまりがない場合、要点がつかめず困惑している場合が少なくありません。

このため、教師が子どもに尋ねた意味を確認したり、質問のポイントを示すことが大切です。

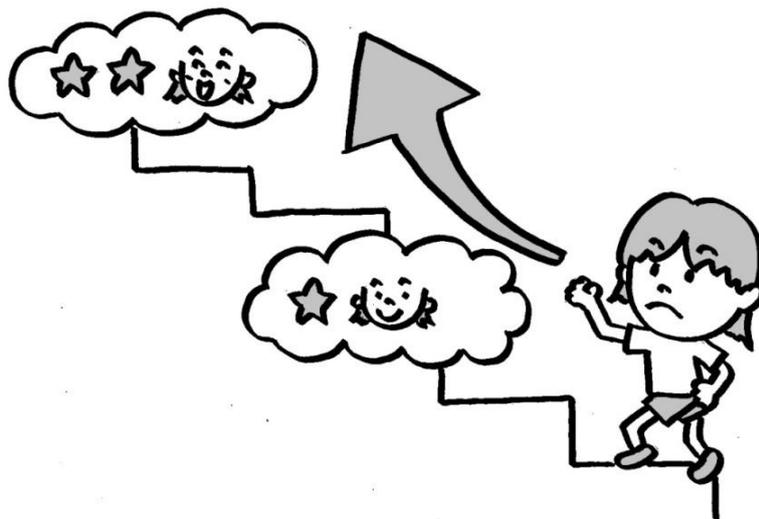
また、教師が、質問の表現を何回も変えることによって、かえって子どもが混乱することがあるので、留意する必要があります。

Q 2 7 : 学力差が大きい学級です。どのような配慮が考えられますか。

A : 一人一人の子どもの実態を把握し、具体的な目標（短期目標・長期目標）や指導内容を記した個別の指導計画を作成することが大切です、

また、指導を進める中で、子どもの理解の状態を随時、評価し、改善や見直しを行うことも大切です。

授業の進め方についても一斉指導と個別指導を計画的に配分することが必要です。特に、個別指導においては、スモールステップで、それぞれの児童の目標に合わせて、確実な理解を促すよう指導することが大切です。



**Q 2 8 : 教師主導ではなく、子ども同士の活動が大事と言われますが、どのような点に注意するとよいですか。**

A : 子どもの実態に合った目標設定をし、子ども同士の活動ができるような環境設定を行うのは教師の大切な役割です。

子ども同士の活動に際して、適宜、聴覚に障害がある子どもに伝わっているか、理解されているかを確認し、相手の意図を汲み取るように、かかわることも必要になります。

また、指導に当たっては、①子ども一人一人に対するねらいに即して教材を提示すること、②発問に対する回答に対し、受け答え（賞賛や励ましなど）を準備しておくこと、③子どもが考えることを重視し、それぞれの子どもの反応を待つ姿勢が大切になります。

Q 2 9 : 小学部（小学校）の低学年の授業で、教科書の音読はどのように行くとよいですか。

A : 小学部（小学生）の低学年では、書き言葉の入門期です。このためていねいな読みの指導が大切です。口形（口の形）を意識して声を出して読むようにしましょう。自分の声が聞こえにくくても口形を意識することで、正しい日本語の言葉（音韻）を理解することにつながります。

繰り返し読む中で、一文字ずつ追うのではなく、単語や意味のまとまりで読めるようになると内容を理解するための助けとなります。

教師がモデルを示したり、区切るところに印をつけたりすると分かりやすいでしょう。初めはゆっくりと音読し、繰り返すうちにスピードアップして、通常の早さで読めるようにしていきましょう。

また、音読をしながら書かれていることを理解するために、挿絵や副教材を示しながら読むことで内容の理解を促すこともできます。



Q30 : かけ算九九をなかなか習得できませんが、どのように覚えさせるとよいですか。

A : 手を叩くなどしてリズムをとるなど、感覚を使って覚えることが大切です。繰り返し、唱えたり、書いたりして覚えると良いでしょう。「さんぱ にじゅうし」というように唱えても良いですし、「さん かける はちは にじゅうよん」というように唱えても良いと思います。

唱えるときには、リズムよく唱えられるようになるまで繰り返し、表などを見て読んでいくことも大切です。

一定の期間に集中して取り組む学習体制が、子どもたちの目的意識を高めることにもつながります。

**Q 3 1 : 音楽科の授業は、年齢が上がるにつれて苦手意識が強くなります。どのように指導すればよいでしょうか。**

A : 聴覚に障害がある子どもにとっては、聴覚をとおして、十分な音や音声情報が入りにくいいため、音楽が苦手な教科の一つであることが多いです。

そこで、音楽が楽しいと思えるような活動にすることが大切です。聴覚障害児にとって、補聴器や人工内耳をつけて会話をすることができても、音程を正しく聞き取ることは難しいことです。そのため、正しい音程で歌うことは容易ではありません。

正しい音程でなくても、自由に大きな声で歌うことができる環境づくりも大切です。繰り返すことで次第に聞き取れるようになる子どももいます。無理強いせずに、まずは楽しむことが大切でしょう。

音程が難しくても、リズムを体で感じるができるものです。ピアノやスピーカー等に耳や体を近づけることで、音の響きを感じられることもあります。いろんな楽器の振動を感じることで、音楽に興味を持てるようになると思います。

また、リズムを感じやすい太鼓などの演奏は、比較的取り組みやすいものです。合奏などを行うときには、リズムを手拍子などで視覚的にわかるようにすることで合わせやすくなります。

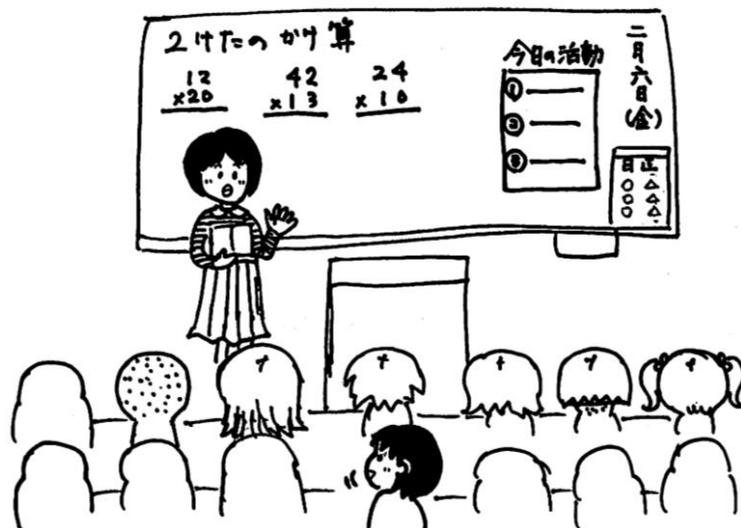


Q 3 2 : 通常の学級に在籍していますが、難聴児一人だけを指導することが難しいです。どのような点に配慮するとよいですか。

A : まずは、座席を見直してみるとよいでしょう。教員の口形を見ることができて、後ろの様子も感じられるところがよいです。前から2列目あたりの逆光にならない中央がよいとされています。授業や話を聞くときに、聴覚障害児は話を推測しながら聞いているので、話題が分かるように事前に伝えることなどが、聞き取りの助けとなります。

授業の始めに、その授業のめあてを提示したり、話のテーマやキーワードを視覚的に示したりすることで分かりやすくなります。

また、話す時には文を短めにする、見ていないときは声を掛けて注目を促す、内容を理解できたか確認するなどのていねいな対応が必要です。



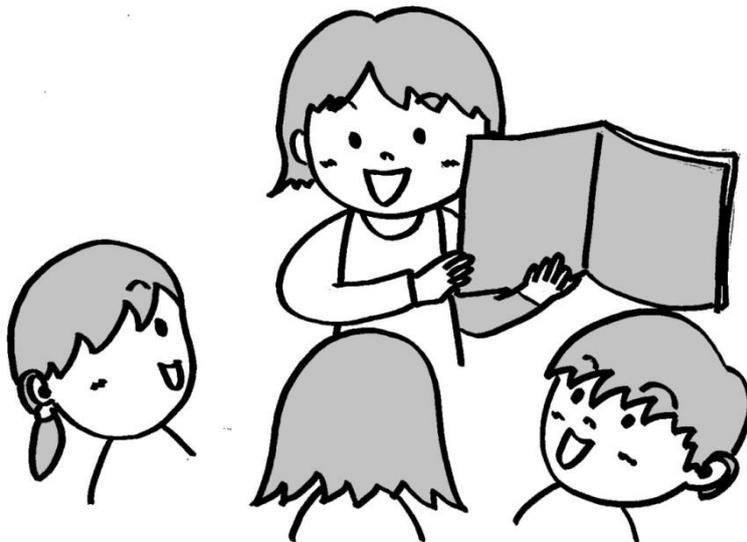
Q 3 3 : 国語科の指導で、音読や読み聞かせの時に、何に配慮すればいいですか。

A : 音読では、どのように読むのか、誰から読み始めるのかをはっきり聴覚障害児に伝えるよう、声の大きさや指さし等の配慮をしましょう。そのようにすることで、自分の読むところが分かりやすくなります。

音読では発音、声の大きさ、スピード等、個別指導をしたり、家庭での練習を促したりして、自信を持って音読できるようにすることです。

読み聞かせでは、読み手の口形が見られるようにすることが大切です。

また、表情豊かに身振りを付けながら読み聞かせることが、子どもの理解を深めることにつながります。



Q34：体育の時に、ホイッスルが聞こえなくて、ルール違反してもそのまま、プレーをしてしまい、友だちから嫌がられることがあります。教師はどうしたらいいでしょう

A：ホイッスルはもともと音が高く、聴覚に障害がある子どもにとって聞き取りにくい音の1つです。その上、プレーに集中していると、さらに聞き取ることが難しくなります。

そこで、チューナータンバリンなど聴覚障害児本人が聞き取りやすい音を合図にするとよい場合があります。子どもによって聞き取りやすい音が異なるため、本人に確かめながら合図を決めておくことも必要です。

また、普段は聞き取りやすくても、プレーに集中していると聞き取れないこともありますので、旗を掲げることや、チューナータンバリンの叩き方を決めておくことなど、視覚的に分かる方法を決めておくといよいでしょう。

クラスメイトには難聴の児童のきこえ方について、理解してもらうことも大切です。



**Q 3 5 : 調理実習の時に水が飛び散って、補聴器が濡れてしまいました。どうしたらいいでしょうか。**

A : 水が飛び散った時には、すぐに乾いた布で拭きます。そして、電池を外して風通しの良い、直射日光の当たらないところに置いておきます。

補聴器や人工内耳を乾燥させるケースを持っている場合は、電池を外してその中に入れておきます。帰宅時には必ず家庭に連絡しましょう。

補聴器については、家庭と相談して補聴器販売店に音の調子を確認してもらいます。

人工内耳の場合は、耳鼻科担当医や人工内耳業者に相談してください。

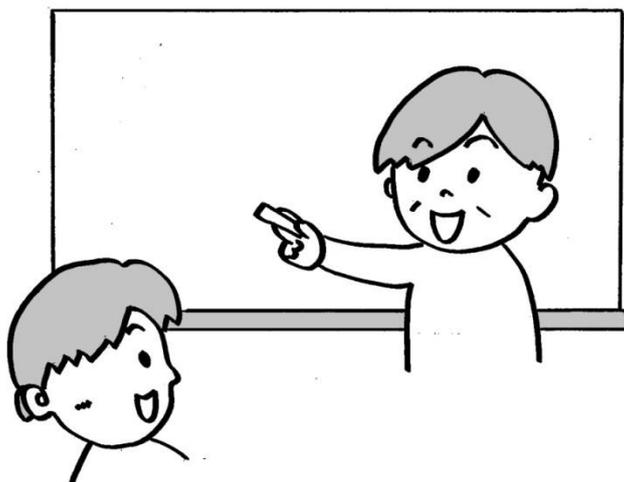
Q 3 6 : 教師が黒板の方を向いて、文字を書きながら説明すると  
分からないと言われます。どうしたらいいでしょうか。

A : 聴覚障害児は、声と口形を頼りに言葉を聞き取っています。黒板の方を向くことで、教師の口形を見ることができなくなるので、言っていることが分からなくなります。

できるだけ板書する前に、「何を書くか」を話したり、板書した後は、全員の子どもの方を向いて話すようにしてください。

ノートを取っているときに話しかけたり、机間指導中、後方から話しかけたりしても聞き取りが難しいので、（口形）を見せてから話し掛けるように心がけてください。

FM補聴器などの補聴援助システムを利用することで、聞き取りが改善することもあります。



**Q 3 7 : 教科学習では、4～5名の班になって話し合い活動をする場面が多くあります。聴覚障害のある児童に配慮することはどのようなことでしょうか。**

A : 聴覚障害児は、補聴器や人工内耳の性能が向上しても、騒がしいところでの聞き取りは困難で、声だけでなく、口形も頼りに話を推測しながら聞き取っています。グループの話し合いでは、同時に複数の子どもが話をしたり、口々に話したりするため、誰が話しているのか分からなくなり、顔を見て話を聞くことが難しくなります。

また、突然、話題が変わったり、雑談になったりするため、話の内容を推測することが難しくなります。事前に司会を決めて進める、発表したい人は挙手をしてから話し始めるなど、話し合いのルールを決めることで、話し手が分かり、話の内容が理解しやすくなります。

また、FMなどの補聴援助システムを利用することで、聞き取りが改善することもあります。

Q38 : 発表するときに、「サ行」がきれいにしゃべれなくて、友だちが笑う時があります。本人も気にしているようです。どうしたらいいでしょうか。

A : 聞こえる人達は、耳で正しい音をフィードバックしながら発音しますが、聞こえにくい子ども達はそれが難しいので、舌や口唇などの調音器官を正しく使って発音を学べるような支援が必要です。

聴力的に聞き分けが難しい場合でも、早期からの発音練習によって発音が改善することができるようになります。

聴覚障害児に対する発音指導の本はいろいろありますので、参考にしてください。

周囲の友だちには、本児には聞こえ方が不明瞭な場合があること、それでも理解して生活していることなどを伝え、きこえ方や話し方に関する理解を図ることも大切です。

Q 3 9 : 英語の発音が聴き取れません。英単語にカタカナを書いて読んでいます。どうすれば聞き取りと発音ができるようになるのでしょうか。

A : <通常の学級で学んでいる場合>

聞き取りができるようになるためには、まず自分で発音できることが大事です。発音の仕方を十分に練習します。最初はカタカナで読み方を書いて読み、何度も声を出して読んでみてください。覚えてきたらカタカナを消して読めるかどうか確かめてみます。

もし読めなければ、英単語ではなくカタカナを覚えているということなので、カタカナがない状態で読めるように練習を重ねます。

<聾学校の場合>

発音の聞き取りが難しいようなら、教師がゆっくり何度も発音して口形に注目させます。

難しいところは指文字や文字で表し、何と発音しているかを理解できるようにします。口形も見ながら聞き取りができるようになってきたら、指文字は使わずに、分からなかったところだけを英単語の上に板書するようにします。

Q40：自立活動は、コミュニケーションだけ行えばいいのでしょうか。

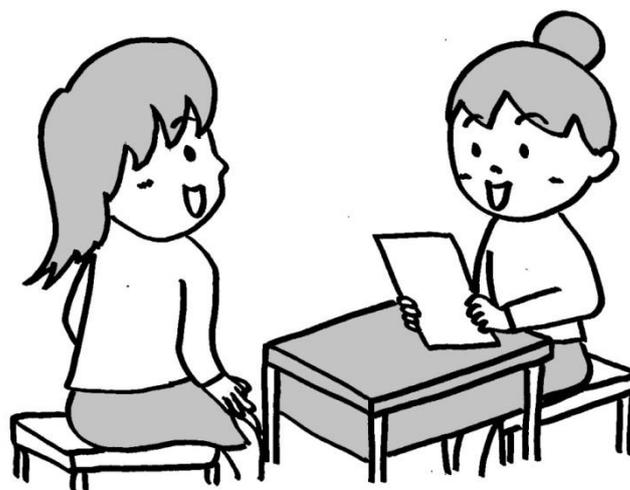
A：自立活動の内容には、「健康の保持」「心理的な安定」「人間関係の形成」「環境の把握」「身体の動き」「コミュニケーション」の6区分があり、障害の状態に応じて心身の調和的発達の基礎を培うのですから、コミュニケーションだけを行えばいいというものではありません。それぞれの内容を、相互に関わりを持たせて内容を設定して指導することが大切です。

聴覚障害の幼児・児童・生徒にとっては、コミュニケーションの発達が最も大きな課題になることも多く、中心的に扱うべき内容がたくさんあります。

コミュニケーション以外にも、本人がより積極的に人や社会と関わって自己実現できるように、個々の持つ可能性を伸ばしていくという視点で工夫していくことが大切です。

Q 4 1 : 個別の指導計画について、保護者の方に説明する際、どのような点に留意して話をすればいいでしょうか。

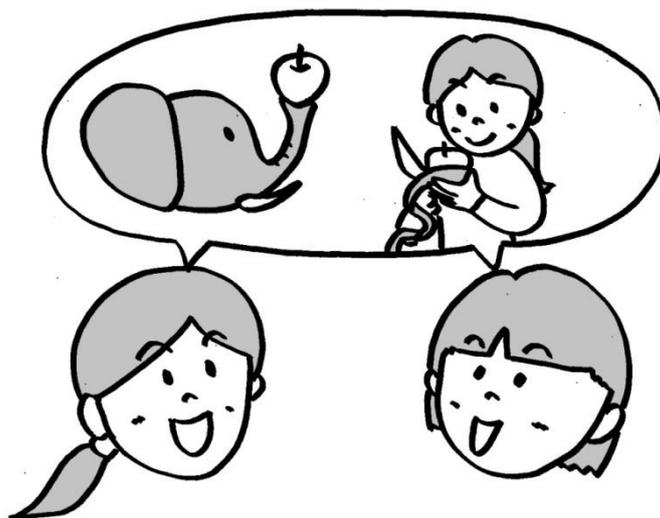
A : まず、今その子が頑張っているところや伸びているところを家庭と共有しましょう。子どもがすでに獲得している力と、これから伸びる可能性の部分を整理して伝えます。次に、その可能性を伸ばしていくために、具体的に学校ではどのような指導をするのかを明確に伝えます。わかりやすい具体的な子どもの姿で伝えましょう。また、どのような姿になったら目標を達成したと評価するかということを伝えておくことも大切です。保護者も取り組みを理解し、成果を共有しやすくなります。家庭でも、かかわりを工夫し、短期目標の積み重ねによって長期目標が達成できるような見通しを持てると、学校と連携しやすいと思います。



Q 4 2 : 幼児に色や動物、物などの名前を覚えさせるには、どうしたらよいでしょうか。

A : 幼児の言語獲得において一番大事にしたいことは、体験を通すということです。カードを見せながら「りんご」と言わせても、その発語には実物のイメージが伴っていないことがあります。

家に帰ってにおいを嗅ぎ、お母さんが目の前で皮を剥いてくれ、「シャリシャリりんご、おいしいね。」と目を合わせてやりとりする中で、子どもは五感をとおして「りんご」のイメージをつかんでいきます。りんごの色は赤と決めつけがちですが、赤くないりんごもあるとか、前に行った動物園でりんごを食べていたのはゾウだったとか、一つの言葉から、それに派生したたくさんの事柄につなげていくことで、子どもは言葉を増やしていくことができます。



Q 4 3 : 家庭で絵日記（日記）を書かせる場合、どのようなことを  
アドバイスするとよいですか。

A : 絵日記は、絵の上手さや内容の量が大切なのではなく、絵日記でやりとりすることで新しい言葉、自分や相手の気持ちの確認、因果関係など、目に見えることだけでなく見えない事柄も一緒に考える活動です。

絵日記を書くときは、なによりも実際の場面での子どもの豊かなやりとり（共感や理解など）が基本になります。

実際の絵日記では、子どもの目線に立って、どんなことに子どもの心が動いたのかを受け止めて、子どもの興味・関心があることを題材にすることがよいでしょう。

また、大人が一方向的に話すのではなく、一緒に再現遊びをしたりして、その体験を想起させることが大切です。絵に合わせた言葉がけをすることが重要です。必要に応じて写真やパンフレットなどを貼り付けて、体験したことがより鮮明になるように工夫することも大切です。

お母さんが、絵日記を描くことに負担を感じたり、何を描いたらよいか分からなくなったりした時は、子どもさんが興味をもったことをお母さんに伝えるなどのアドバイスをして、お母さんが積極的に取り組めるように励まします。



**Q 4 4 : 聾学校で学級の子どもが二人です。少人数学級で指導する場合の工夫や配慮について教えてください。**

A : 少人数の場合、児童の実態に応じた細やかな指導ができるという点は最大のメリットです。しかし、その反面で、多様な意見に触れる機会が少なくなってしまうことも事実です。情報不足や経験不足となってしまうことも多い為、体験活動を多く取り入れたり、新聞等を活用していろいろな情報に意識的に触れさせたりすることも大切です。

また、授業においては、教師が、児童とは違う視点での意見を発表したり、一緒に話し合い活動に参加したりするなどして、児童が多様な考えや意見に接する機会を設けるように工夫することが必要です。

**Q 4 5 : 通常の学級（小学校）で、聴覚障害について、周りの子どもたちへの難聴理解をどのように進めるとよいですか。**

A : 聴覚に障害がある子どもと、周りの子どもとのトラブルが見受けられることがあります。聴覚に障害がある子どもの聞こえの状態は様々であり、補聴器等を装着していても、話し手との距離や位置によって聞き漏らしや聞き落としが多いものです。このような状況を、日頃から機会があるごとに伝えておくことが大切です。

それでも、子どもの聞こえの状態によっては「呼んだのに無視された。」などと誤解が生じることもあります。周囲の子どもたちに「聞こえにくいとはどういうことか。」を理解してもらい、どのようにすれば伝え合うことができるかについて、具体的な場面に即して考える場を設けましょう。

また、聴覚に障害がある子ども自身が、自分のきこえについて説明できる力も育てていく必要があります。

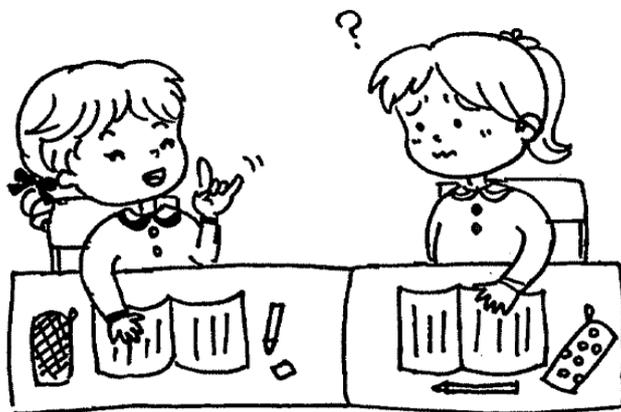
Q 4 6 : 交流及び共同学習で、相手の学校の子どもは「指文字」で自己紹介をしてくれますが、聴覚障害のある子ども本人には、分かりにくいようです。どうしたらいいでしょうか。

A : 交流先との事前の打ち合わせはとても重要です。全ての聴覚に障害がある子どもが、「指文字」や「手話」を身に付けているとは限りません。

保護者とも相談しながら、本人の聞こえの状態やコミュニケーションの仕方などについて知らせておくことも大切です。

また、事前に交流先の学校を訪問し、難聴体験を経験することで、交流先の子どもたち自身が伝える工夫をすることがあります。

交流当日、状況に応じて教師と本人がどのようなコミュニケーション方法で伝え合っているかを見てもらうことも、次に繋がる大切なことです。

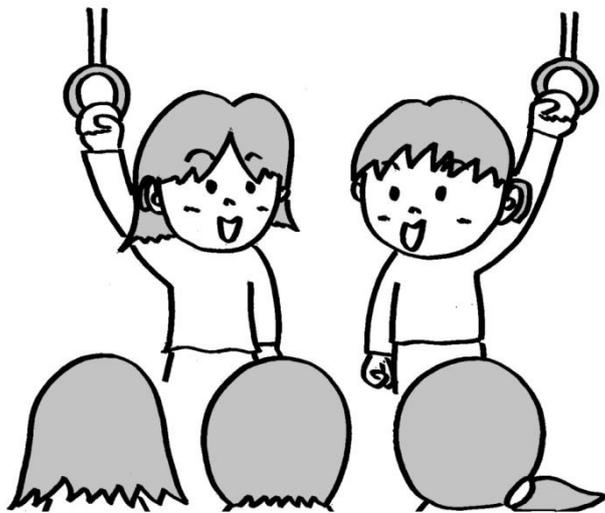


Q 4 7 : 社会見学で、地下鉄に乗ったら、「ゴーッ」とかなり大きな音でした。そのような場合、担任はどのようなことに気をつければいいでしょうか。

A : 聞こえの状況の把握をすることが第一に大切です。大きな音に対してどのような反応を示すのか観察し、補聴器のボリュームを下げるよう促すことが必要です。

聴覚に障害がある子どもにおいても、過度に大きな音は不快なものですし、耳に悪い影響を与える可能性があります。できれば、促されなくても、子どもが自分で調節できるようにさせたいものです。(補聴器によっては、大きな音は自動的に音量が下がるものもあります。)

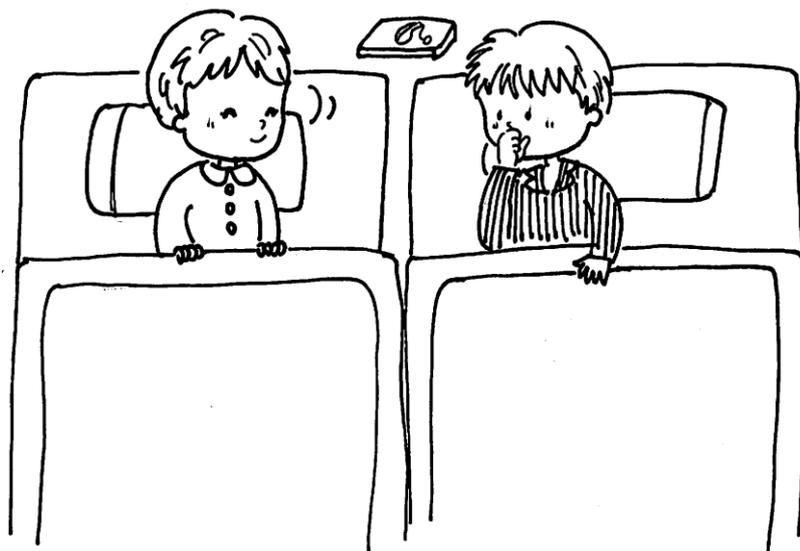
また、騒音だけでなく車内では放送がある場合もありますので、適宜、そのことも伝えておくとよいです。



Q 4 8 : 宿泊学習では、寝るときに補聴器をはずします。寝ている時、緊急事態が起きたらどうしたらいいのでしょうか。

A : 緊急時に備え、部屋の鍵は教師が保管するようにします。日頃から、就寝時、補聴器は、必ず枕元に置くように習慣化しておくこと、一人で行動するのではなく、集団で行動することを指導します。

また、本人が友だちに対して、例えば「地震があつたりしたら起こしてね。」「避難する時は起こしてね。」ということ伝えておくなど、友だち同士で情報を確実に伝えられる状況を整えておくことも大切です。



Q 4 9 : 交流学級に入った時、難聴特別支援学級の担任としては、  
どのように支援すればよいのでしょうか。

A : 交流学級担任と連携を取り合うことが大切です。学級の児童数、教室の音響状態などを把握し、子どもにとって理解しやすく、落ち着いて話が聞ける座席や視覚的教材の配置、教師の話・口形・表情・位置・動きなどについて、学級の先生に理解を求めます。

聴覚に障害がある子どもへの配慮は、学級全体の子どもにとっても、学習環境をより良く整えることに役立ちます。

交流学級での経験は、聴覚に障害がある子どもの会話力や社会性を育てる学習の機会になります。

**Q50：聴覚障害の子どもへの指導の仕方や配慮について詳しく知りたいです。どこに尋ねるとよいですか。**

A： まず、聴覚障害特別支援学校（聾学校）に、相談してください。ほとんどの聾学校では、教育相談や巡回相談などの地域支援を実施しています。

地域に聾学校がない場合、聴覚障害（難聴）特別支援学級や聴覚障害（難聴）通級指導教室に相談してみるのもよいでしょう。その他、教育センターや教育委員会に相談してみてください。

教育機関に限らず、言語聴覚士が所属するような療育機関や医療機関などに相談してみることもできます。多くの医療機関は教育機関と連携しています。

## 編集者一覧

青森県立青森聾学校

福島県立聾学校

東京都立大塚ろう学校

長野県長野ろう学校

静岡県立静岡聴覚特別支援学校

佐賀県立ろう学校

庄司美千代（文部科学省初等中等教育局特別支援教育課特別支援教育調査官）

原田公人、定岡孝治、藤本裕人（国立特別支援教育総合研究所）

イラスト

柳澤亜希子（国立特別支援教育総合研究所）

岡田拓也（筑波大学附属久里浜特別支援学校）

国立特別支援教育総合研究所 平成26～27年度専門研究B  
「聴覚障害教育における教科指導及び自立活動の充実に関する実践的研究  
～教材活用の視点からインクルーシブ教育システム構築における専門性  
の継承と共有を目指して～」成果報告書 別冊資料

平成28年3月 第一刷発行

研究代表：原田公人 (harada@nise.go.jp)